

博士學位論文要約

論文題目： 『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の受容
氏名： 王 欣
要約：

上田秋成の浮世草子『諸道聴耳世間狙』は、明和元年（一七六四）十一月に開板願書が出され、明和三年（一七六六）正月に出版された。

従来『諸道聴耳世間狙』に関する多くの研究は、単に人物の特徴や個々の趣向における『諸道聴耳世間狙』と、実在人物、先行浮世草子、日本の古典、中国古典、当時の社会の出来事、演劇作品との類似性を指摘するだけに留まっている。そのため、人物関係及び物語の展開の視点から、『諸道聴耳世間狙』を先行研究で論究されたモデルとなった実在人物、関連性が指摘された当時の社会の出来事や取り上げられた他作品と詳細に比較検討すると、説明が付かないところが多い。

また、数多くの演劇関係の要素が物語の中に受容されたことは、『諸道聴耳世間狙』の特徴の一つだと言えよう。そのため、『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の受容状況の解明を通し、『諸道聴耳世間狙』の物語の構成方法を追究することができると思われる。そこで、本論文は個々の趣向のみならず、人物造型、物語の展開という角度から、『諸道聴耳世間狙』における演劇作品の受容を再検討し、『諸道聴耳世間狙』の物語の構成方法の究明を目的とする。

本論文では、章に従い、『諸道聴耳世間狙』の一之巻一「要害は間にあはぬ町人の城廓」、三之巻三「雀は百まで舞子の年寄」、四之巻三「公界はすでに三年の喪服」、五之巻一「昔は抹香けむたからぬ夜咄」、五之巻二「祈禱はなでこむ天狗の羽帚」という五つの物語における演劇作品の受容を具体的に検討していく。

第一章では、『諸道聴耳世間狙』一之巻一の担い売りになった小西三十郎が得意先から「富十郎がお初徳兵衛をして見せ」と言われる場面に注目する。そして、『諸道聴耳世間狙』一之巻一の後半部分、小西行長の子孫に当たる小西三十郎が、山本勘介の子孫である山本勘六に騙される場面の展開が、中村富十郎がお初を演じた歌舞伎『女夫星浮名天神』の生玉蓮池の段の展開と高い類似性を持っていることを新たに指摘する。そのほか浄瑠璃『信州川中島合戦』、『甲陽軍鑑』の仁義を堅く守り、武勇に富んでいる山本勘介の人物像と正反対に描かれた『諸道聴耳世間狙』一之巻一の卑怯な武士山本勘六の人物像を見出す。『諸道聴耳世間狙』一之巻一の前半部分の小西三十郎の武芸好みやその後の零落と、浄瑠璃『本朝三国志』、演劇作品『夏祭浪花鑑』、先行浮世草子、実在人物との関連はすでに指摘されている。よって、『諸道聴耳世間狙』一之巻一の前半部分と後半部分を考え合わせれば、『諸道聴耳世間狙』一之巻一が、『甲陽軍鑑』、浄瑠璃『信州川中島合戦』、『本朝三国志』、歌舞伎『女夫星浮名天神』の生玉蓮池の段の重層化によって作り上げられたことが認められる。さらに、『諸道聴耳世間狙』一之巻一では、人物造型の変更、趣向の置換を通じ、『甲陽軍鑑』、浄瑠璃『信州川中島合戦』、『本朝三国志』の山本勘介の忠義、武勇、小西弥十郎の出世と反対に、武士山本勘六の卑劣さ、小西三十郎の零落が描かれていることが確認できる。

第二章では、まず『諸道聴耳世間狙』三之巻三の都の舞子という宇治江の身分、遊

廓という問答が行われた場所に焦点を当て、遊廓の規範に反して客を論破する宇治江の傲慢さ、一夜の契りで懐妊する宇治江の軽薄さを読み取る。その次に、『諸道聴耳世間狙』三之卷三の石河五郎市の出生譚と、浄瑠璃『七條釜淵雙級巴』の石川五右衛門の出生譚との関連性を検証した上で、物語の展開における『諸道聴耳世間狙』三之卷三の石河五郎市の転落譚と浄瑠璃『傾城吉岡染』の石川五右衛門の転落譚との高い類似性を指摘する。その上で、主人公の転落譚における『諸道聴耳世間狙』三之卷三と浄瑠璃『傾城吉岡染』との相違点に関する分析を以て、『義経記』の「弁慶の千人刀」と対照的に『諸道聴耳世間狙』三之卷三の結末部分には、石河五郎市（弁慶のやつしとしての弁蔵の息子）が、馬若衆（牛若のやつし）の巾着を盗み取ったという斬新な展開が設定されていることが確認できる。それだけでなく、義理と意気地を尊ぶ衆道の本旨を遵守することができずに、窃盗を続ける陰間石河五郎市の人物像も看取できる。『諸道聴耳世間狙』三之卷三の宇治江と僧の色欲問答、宇治江の一夜の契りによる妊娠と謡曲『卒都婆小町』、浄瑠璃『小野小町都年玉』、『御所桜堀川夜討』、『昔男春日野小町』、『七小町』、歌舞伎『大和歌五穀色紙』との関連がすでに論証されている。そのため、『諸道聴耳世間狙』三之卷三の舞子宇治江の僧との色欲問答、弁蔵と一夜の契りを、石河五郎市の転落譚と合わせてみると、『諸道聴耳世間狙』三之卷三が、小野小町、石川五右衛門と関連する謡曲、浄瑠璃、歌舞伎を巧妙にひとつなぎにして構成されていることが確認できる。こうした構造を持つ『諸道聴耳世間狙』三之卷三では、人物造型の変更、趣向の置換・添加が行われたため、女色、男色の定め事を守ることができずに、様々な摩擦を引き起こす浅ましい舞子宇治江と陰間石河五郎市の人物像が描出されたのである。

第三章では、『諸道聴耳世間狙』四之卷三の「小野のおつう」という設定に着目し、物語の展開において、『諸道聴耳世間狙』四之卷三の服喪中の唐土太夫と三人の客の知識問答が、浄瑠璃『浄瑠璃御前物語』熱海本の精進中の浄瑠璃御前と御曹司の知識問答と関連性を持っていることを論証する。それに加えて、『諸道聴耳世間狙』四之卷三の知識問答で描き出された遊廓の規範に背く行動をとる滑稽な唐土太夫の人物像を把握する。そのほか、唐土太夫と住屋吉介の恋問答で贈られた詩と和歌を検討し、人物造型と人物の配置において、『諸道聴耳世間狙』四之卷三の恋問答が謡曲『白楽天』と高い類似性を持っていることを指摘する。そして、趣向の設定における『諸道聴耳世間狙』四之卷三の恋問答と浄瑠璃『新うすゆき物語』上巻、『江談抄』第四の都在中の詩と女房の和歌、謡曲『白楽天』との関連を明確にする。さらに、女性が詩を作り、男性が和歌を作ると設定したため、『諸道聴耳世間狙』四之卷三の恋問答から、人々の通念及び遊廓の規則に反しながらも、恋問答を展開していく唐土太夫と住屋吉介の滑稽さが読み取れる。このことから、人物造型の変更、趣向の置換によって、演劇作品と関連する『諸道聴耳世間狙』四之卷三が、遊廓の規定を無視する唐風好みの唐土太夫の滑稽譚として構想されていることが認められる。

第四章では、『諸道聴耳世間狙』五之卷一の架空の狐釣りという設定に注目し、物語の展開における『諸道聴耳世間狙』五之卷一と、浄瑠璃『那須野狩人玉藻前囃袂』との強い関連性を明らかにする。なおかつ『諸道聴耳世間狙』五之卷一に取り入れられた金の要らない狐釣りの見物、狂言『釣狐』の老狐が畏にかかるまでの場面、浄瑠璃『芦屋道満大内鑑』第四の与勘平が葛の葉に褒められた場面、悪右衛門の家来たちが狐の与勘平に丸坊主にされた場面に考察を加え、架空の狐釣りに引っかかった七左衛門の

愚かさ、空威張りをする三浦介兵衛の滑稽さ、架空の狐釣りを仕掛ける共謀者である礒右衛門と墨五郎の狡猾さを指摘する。これを踏まえると、吝嗇ものの滑稽な失敗譚である『諸道聴耳世間狙』五之巻一が、こうした狐に関連する演劇素材を数珠つなぎにして構成されていることが究明できる。

第五章では、詳細な本文比較によって、物語の展開における『諸道聴耳世間狙』五之巻二の天狗との出会いと歌舞伎『霧太郎天狗酒醜』大序、三ツ目、『諸道聴耳世間狙』五之巻二の金比羅参詣と浄瑠璃『千載集』第三、『薩摩守忠度』第三との強い関連性を見定める。それに加えて、『諸道聴耳世間狙』五之巻二に取り入れられた老医高村宮内、旅僧、小者の小平六、当時話題となった摩耶山開帳、金比羅、天狗と関連する諸要素に関する検討に基づき、『諸道聴耳世間狙』五之巻二の天狗と出会う場面の老医高村宮内、旅僧、小平六の人物造型と、浄瑠璃『十二段』第一の牛若、僧正、世の介との関連性を明らかにする。それだけでなく、不合理な解決法を提言し、人から物品をせしめようとする祈祷師高村宮内の手口の荒唐無稽さ、天狗の通力を信じ込む信者善次郎の愚かさも確認できる。

以上のように、謡曲、狂言、浄瑠璃、歌舞伎にまたがる数多くの演劇作品が、『諸道聴耳世間狙』のこの五つの物語に受容されたことが確認できる。また、物語の展開における演劇作品との共通点を考察した上で、人物造型の変更、趣向の置換・添加の視点から、関連演劇作品との相違点を検討した。こうした検証を通じ、物語の展開、人物造型、趣向の設定において、演劇作品と関連性を示している『諸道聴耳世間狙』の五つの物語では、演劇作品の重層化が確認できる。さらに、重層化された演劇作品と当時の世相に関連する諸要素との融合によって構成された物語の中で、徹底的に登場人物を卑小化するという『諸道聴耳世間狙』の五つの物語に通じる構成方法を見出すことができる。

これらを踏まえると、演劇作品を背景とする『諸道聴耳世間狙』の五つの物語の構成手法、創作意図への理解を深めるのに、『諸道聴耳世間狙』の五つの物語における演劇作品の受容を明らかにすることは、非常に重要な手段だと言えよう。

本論文で、演劇作品の受容が究明されたのは、『諸道聴耳世間狙』十五の物語の中の五つの物語だけであるが、『諸道聴耳世間狙』の五つの物語における演劇作品の受容状況をみると、受容の程度においても、取り入れられた演劇作品のジャンルにおいても、活かされた演劇作品の組み合わせ方においても、多様性に富んでいることが指摘できる。そのため、演劇作品の受容という立場から明らかにした『諸道聴耳世間狙』の五つの物語に通じる構成方法は、『諸道聴耳世間狙』の物語の構成方法に通じるものがあると想定される。